

日本語にコード化された認識作用：言語過程説による印欧語文法記述の是正

著者	氏家 洋子
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	3
ページ	35-45
発行年	2003-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001015/



日本語にコード化された認識作用： 言語過程説による印欧語文法記述の是正

Cognitive Activities Encoded in Japanese:

Correction of a description in European language grammar derived from the language=process theory

氏 家 洋 子

UJIE, Yoko

Ji words in Japanese directly show a speaker's mental process or cognitive activities. Some parts of paralinguistic in English is encoded in Japanese. Japanese has a group of words (SEMP) to encode a speaker's mental processes. When they speak, Japanese people tend to connect what they perceive/recognise with their personal experience and/or knowledge or with common notion or idea in their own group. This way of expression in Japanese is conjectured to be derived from in-group communication.

We also find that the interaction-oriented function is encoded in Japanese sentence final particles which belong to *ji* words. This proves that the base of communication is used to be in-group.

Shi- and *ji-* honorifics by Tokieda's classification were found to correspond to referent and addressee honorifics, indicating that a speaker's cognition is revealed in *ji-* honorifics. We also show that the solution of a confusion between referent and addressee honorifics in traditional description of European language was confirmed through the cognitive analysis of Japanese honorifics.

目 次

- | | |
|--|---|
| 1 はじめに — 日本語探究の在り方と欧米の
言語研究の潮流 — | 3.2 認識と集団内価値観との結びつけ
— 差別意識の現れる地点 — |
| 2 日本語における客体化された表現「詞」
と主体的表現「辞」 | 4 対人意識のコード化 |
| 3 日本語にコード化された認識過程
— 「含過程構造」の発達とそれを育んだ社
会集団 — | 4.1 終助詞と対人意識 |
| 3.1 認識と知識・経験との結びつけ | 4.2 「辞」の敬語 — 'addressee honorifics' 設
定の誤りを自覚化 — |
| | 5 結 び |

キーワード：精神過程と認識作用、コード化、言語過程説、日本語、ウチ社会のコミュニケーション
Key words : mental process and cognitive activity, encoding, the language=process theory, Japanese, in-group communication

1 はじめに—日本語探究の在り方と欧米の言語研究の潮流—

人のさまざまな精神活動について便宜上或る部分や局面に限定して探求するとしよう。或る人の精神活動は当人の生生活動、また、それと重なり合う社会生活と共にある。そこでの当人の具体的な精神活動を知るには行動や表現行為を手がかりにすることになる。当人の意識的な部分については表現行為の中でもことば、言語行動から多くの情報を得ることができる。その言語については当人の使うことばがどんなラングであるかを知ることが基本になる。

そこで、ラングを分析対象とする際の問題点が浮上する。或るラングを分析対象とした時、系統の違うラングの分析から導かれた結果をあてはめることで、様々な不都合が生じる。現実には日本語の母語話者によってそれが日本語を分析対象としてなされたのは早くに江戸後期のことであった。オランダ語の文法を下敷きにした日本語分析にも一定の成果はもたらされたであろう。それは後に他の印欧語族の文法を下敷きとすることによって替わられ、勢力を得た。異なる系統の言語研究に基礎を置いた日本語分析は外形（音声）に注目して文法を考えるという形式をとって現在に続く。日本には日本語分析の言わば伝統が確立していたし、また、それは現代にまで受け継がれてきたという中においてのことである。

では、なぜ、また、どんな不都合が生じるのか。そこにあるはずの多くの要素から、根本的な点を挙げれば、次のようになろう。

どんなラングも人間の精神活動の或る部分をコード化したものである。それは民族の生

存活動と共になされた精神の営み、具体的には或る意識のまとまりがまず信号となったことに始まると言えよう。信号になる、つまり、信号として機能し得るといことは共同体のメンバー間に同様の意識のまとまりがあったということが前提にある。その信号はやがては言語記号としてコード化されるに至る。ここで大事なことは人間の精神活動のすべてがコード化され、そのされ方が違う、というのではないという点だ。どんな精神活動がコード化されるかはその共同体の、早くは生生活動と共にあった意識のまとまりにより違うものになる。その生生活動はメンバーが自然環境とどう取り引きしたかを物語る。コード化されるものの違いはここに遠因をもつと言えらるだろう。

どんな意識のまとまりがどのように言葉となったかについて考えるには精神活動、あるいは精神作用の或るまとまりが言語化されたものとして、「文」という単位を見ることがしたい。系統発生的にも個体発生的にも初期には一語文という、状況と共にあり、周囲の人の解釈があって成り立つ、必ずしも形態的に独立した文とは見えないものがある。それを考えるのでよいだろう。言語行動としてことばを捉えることの必要性がここにある。情報の発信者としては、しかし、それは、或る状況、事態においての、或る精神作用、或る意識のまとまりである。ここがことばの原点である。その意識のまとまりが、不完全であっても言わば文として表されるからである。パロールとされるものであり、やがて、こうして交信することの積み重ねにより、結果としてそれが共同体のメンバーに共通の資産としてのラングになる。

ところで、最近の言語学の潮流を見ている

と、コード化されたものの世界を対象とするラング研究から、言語と認知という、記号化以前の精神活動と言語記号との結びつけという形が盛んになっている。言語コード化されたものからその内奥の世界を探ろうとする動きは当然来るべきところへ来たと言える。この流れとは20世紀の初頭以来、ラングが研究対象とされた印欧語研究の分野に発するものを指す。だが、19世紀前半にフンボルト(Humboldt 1836)はことばは精神活動であるとした。ランガー・ジュこそがことばだった。この地点への回帰と見ることもできる。

一方の日本語探究にあっては出発が文学作品に表れた精神活動の究明と共にあったことが主因とされる(時枝1941、1955)が、認知・認識と、つまり、精神作用と切り離されることなくそれがなされてきた。印欧語が屈折語であり、日本語が膠着語(接合語)とされることもコード化のされるものやされ方の相違という意味でここに関わると考えられる。山田孝雄(1931)は文の成立に意識を統一する心理的作用としての統覚作用というものを考え、それが言語の形をとったものを「陳述」と呼んだ。これは印欧語に基軸を置く言語学には対応する術語をもたない、日本語を対象として発達した文法学における用語である。ここから日本語の文に思考、判断を述べる形で成り立つもの(述体の文)と対象に呼びかける形のもの(喚体の文)という二つの構造の別があることを指摘している。時枝誠記はこの陳述に関して山田の考え方を継承し、徹底させ、それを次節で触れる「辞」の一種とした。時枝は言語とは表現し、理解する過程そのものであり、ここを離れて言語はどこにも成立しないとする「言語過程説」を提唱した。が、これは時枝個人の手になるものでは

なく、日本における伝統的な言語観、言語研究を引き継ぐものだと時枝自身、述べる。過程こそが言語だと意識化し明文化した時枝(1941、1955)の業績は鈴木一彦(1980)により「江戸時代以前の国語研究者の国語に立ち向かう態度なり意識なりを見事に整理し、一つの理論を組み立てた点、その理論に基づいて、従来解決し得なかった国語現象の多くを解明している点」に大きな功績を認めるとされる。認知言語学が日本に紹介されるに及んで、「時枝言語過程説」は夙にそれをなしているという主張が文学研究者によりなされた(藤井2000)。認知・認識の過程を言語と不可分離の関係ととらえることは日本の伝統的な言語観の前提となっていると言っていることができるだろう。

次に、この日本語を具体的に認識過程、あるいは広く、精神活動とどう関わり、どう表現されているかについて見ていくことにしよう。

2 日本語における客体化された表現「詞」と主体的表現「辞」

言語過程説、あるいは日本語の伝統的な言語論・文法論では、日本語というラングについてそれを構成する語を二分するなら、客体化された表現、すなわち「詞」と主体的表現、すなわち「辞」になる。これは時枝によって、概念過程を経た、経ないで定義され分類されているものだが、現時点まであまりに社会的な理解を得られなかったことを勘案して、ここでは定義に使われていない説明を使った。一方、いわゆる「学校文法」では自立語、付属語と分ける。これは橋本進吉(1934、1948)による分類で、外形(音声)に基づいて設けた単位としての文節を構成する資格によって

分けたものである。今泉忠義（1980）によれば口語文法の記述のまだ影の薄かった1932年、中学校教授要目の改正に伴って編まれたという橋本による『新文典』は口語の文法について平易に説かれたという特色をもつ。時代的、社会的背景の力が大きく働き、その国定性が確立した（橋本も呼称としては「詞」と「辞」としたこともあるが、その内容は自立語、付属語である）。明治以降の印欧語族という屈折語の文法記述を基軸として、系統の違う膠着語としての日本語というラングを分類したわけであるが、この時注目した、あるいは、し得たのは形式であった。かくて、文節の形成が一語でできるか否かで分類する。助詞と助動詞を付属語とし、その他の品詞を自立語とした。平易であるということは一般性をもつ。後に見る敬語分類も同様である。そして、日常生活のレベルで常識となったものの力が理論的説明の理解を阻むことが想像以上であることも同様である。

一方、言語は過程であるとする立場では人の精神活動と常に不可分な形であるものとしてことばを見るために、客体化された、もしくは、概念化された語であるか、それとも、話し手・書き手という言語主体の個人的な精神活動を示す主體的なものであるかにより、「詞」と「辞」とに分けた。ここでは言語の基本的な単位は「文」である。「文」は「詞」と「辞」により成立する。学校文法では基本的単位はまず「語」とされる。ここに言語観の決定的な相違があり、ことばと精神活動をどう捉えるかの分かれ目が映し出される。表現および理解の過程そのものが言語であるという時、語の分類の内訳も別の姿をもつ。「辞」の中に大方の助動詞、助詞が入る点、「詞」に名詞、動詞、形容詞が入る点はそれぞれ

れ学校文法の付属語、自立語に対応している。が、感動詞、接続詞（氏家1974a）、一部の副詞等は「詞」でなく、「辞」であり、また、一部の助動詞は「詞」となる。その詳細に入ることはここでは控える。

3 日本語にコード化された認識過程

—「含過程構造」の発達とそれを育んだ社会集団—

人は通常誰でも何らかのラング／言語体を母語としてもつ。ここでは日本語でない或るラングを異言語と呼ぶことにしよう。異言語を母語とする人を日本語非母語話者と呼ぶ。その人達が日本語を学び始めた時、わかりにくい日本語とはどんな部分だろうか。様々なものが考えられるが、その一つに母語にない事物・事象を捉えてコード化されたものがあるということは明言できるであろう。もの、物体に付けられた名がラングによって異なる場合、それは大雑把に言えば覚えれば済むと言える。事象に関しても、たとえば自然条件に規定されて生じる現象に付いた名はその現象を見聞きすることで、学習に困難は生じないとされる（Furth 1968）。

問題は或る事象の捉え方が一語になっている場合。とりわけ、それが精神内の活動に関わる場合である。その一として、日本語における含過程構造をもつ語を挙げたい（氏家1974b、1989、Ujii 1986）。もちろん、日本語社会で生活する中で、非母語話者はこれを次第に身につけることができる。また、そうした語が使えるようになると、当人の日本語は「日本人のよう」と周囲から賞賛されることになる。それは一語で一定の時間にわたる心的過程を表すものである。例としては次のような一定の種類の副詞、助詞、それに、主に助

詞を核とする連語、その他多岐にわたるが、いずれも伝統／時枝文法で「辞」に分類される語である。ただし、「或る種の副詞」については時枝の創始による。歴史的には意味内容や機能が本来のものから作られて来た、あるいは、工夫されてきた結果としてあることがわかる（氏家1989）。

やはり／やっぱり 涼しい。
たかが愛人じゃないか。
 お茶はご自由にお飲み下さい。
 そうじゃないのんです。（氏家1969、1992）
 ○○（仕事名）までして生き延びてきた。
 男のくせにだらしない話だ。

異言語の一としての英語で相当する語を探すと、最初の例文にはまず次の二文が挙げられる。

It is cool. ('is' の部分に強勢が置かれる)
 It's cool, you see!?' (Collick 1986) 'you see!?' の部分も通常、上昇調で発話され、両方の英文とも音調、つまりパラランゲージ（周辺言語）によっており、それに相当するものが日本語ではコード化されているということになる。ただし、英文でのこれらの表現はバーンシュテインの術語を使えば「限定コード」に当たる。英語には「精密コード」があり、これを使って表現するなら、次のようになる。

As I expected, it is cool. (Healey 1974)
 As I expected/ As you said/ As people say, it is cool.

後者のように文脈で言い換えることも可能で、これらに相当するものを日本語は「やはり」で言い表していると言えよう。「精密コード」による英文は日本語のもつ一定の心的プロセ

スを見事に表している。英語では従属節を要するだけのものを「やはり」は一語で表す。もちろん、日本語でも「(やっぱり) 私が思った通り」などと言うことはできるが、だいたい不必要であり、「やっぱり」一語でのやりとりで十分であり、かつ、効率がよい。

文化人類学のホール (Hall 1976) は文化をハイコンテキストとローコンテキストのものに二分し、日本での生活経験をもとに日本を前者の代表格に挙げた。いわく、「多くの情報は物理的環境や人々の内側にあり、メッセージの言語化された明白な部分で示される情報はごく少ない」。世界の文化を社会心理学の立場から調査したホフステードは集団主義文化で自明なことも個人主義文化では明白に表現されねばならないとし、集団主義文化ではハイコンテキストなコミュニケーションが多く見られるとした (Hofstede 1997)。これは古代日本語の研究者である大野晋が日本語を基本的にウチ社会でのコミュニケーションによる言語 (大野 1978) としたことと符丁を合わせている。

3.1 認識と知識・経験との結びつけ

含過程構造には次の二つの種別を見ることが出来る (Ujje 2003)。

A型：話者が認知・認識したことを自己の既得の知識・経験内容と結びつけて発話するもの

B型：話者が認知・認識したことを自己の所属集団の既成の価値観と結びつけて発話するもの

似通ってはいるが、A型は個人的なレベルのもの、B型は集団レベルに属している。まず、A型を見よう。話し手が今、「涼しい」と感じ、この認知内容をそれ以前に何らかの情報等に

より予期していたという事実を想起して結びつけて発話する時、「やはり」が選ばれる。「やはり／やっぱり涼しい。」「さすが」「まさか」「よもや」等々、予期との合致や不一致、また、価値的結びつけ等が頻繁に意識されるからこそ、このような発話がなされる。この言わば一人称的、主観的発話でコミュニケーションが可能であるということは一定の社会的特質を反映したものと見えようである。

「あの子の年代を考えたらなまじこんなこと、知らせないほうがよい」などの「なまじ」も既得の知識・経験に基づく予見とセットになった語である。集団全体が一人称者の、つまり、同じような前提、価値観をもつがゆえにこれらの発話が可能なのだと言えよう。

3.2 認識と集団内価値観との結びつけ — 差別意識の現れる地点 —

B型に属するものとしては次のような例が挙げられる。

- ・ しょせん愛人じゃないか。
- ・ たかが秘書じゃないか。
- ・ Xさんは〇〇（仕事名）までして生き延びてきた。
- ・ Yさんは女のくせにだらしない。
- ・ 女だてらに一升酒くらって。

A型B型共、発話自体は個人的なレベルの意識を表明するのだが、その意識が所属集団の既成の価値観と直結しているという意味で、B型を区別することができよう。これらの副詞や連語は必ずしもこのような時にのみ使われるとは限らないが、人を個人としてでなく、或る集団に括り入れて表現する場合が問題になる。年代、性、職業、国籍等々の集団に入れて他者を見ているのだが、見る主体はその集団には属さず、集団外から見ている。ここ

にもウチ集団でのコミュニケーションを図ってきた言語使用の特質が映し出されている。互いに他の集団、つまり、ソト集団の人間として対象を見て発話する姿勢である（氏家2001a）。

当然のことながら、差別意識の表明はこうした表現によりなされる。対象を個人として見ないという姿勢は集団主義社会では自然に醸成される。そこでは自身をも或る集団の一人として見ることになる。差別に関してはマスコミで自主規制の形をとって、いわゆる「差別語」が使われないようにされている。しかし、それが「めくら」「おし」「きちがい」など、いずれも「詞」、つまり、客体的な語であることを思うと不思議である。それは非個人的なものであり、文という個人的な表現のなかでどう使われるかに使い手の意識が表れるはずだからである。「詞」ではなく、話し手の主体的・個人的なものが表される「辞」にこそ差別意識の有無は端的に見出だされる。

4 対人意識のコード化

話し手が対話時にどんな意識状況にいるかは発話の形態に様々な異なりを見せる。それはラングによっては音調で示されるだけかもしれないが、また、どんな意識がコード化されているかがラングによって違うということも想定される。直接的には発話の相手をどう意識するかが大きく関わるように思われるが、これはそれがコード化されているラング（たとえば日本語）の話者の想定かもしれない。

言語過程説では「話者は特定の意識状態の下で発話する」とする。言語（表現）成立の要素として主体、素材、場面が挙げられるが、そのうち、場面については場面論が設定されている。場面とは話し手（主体）にとって中

心的には相手（聞き手）であるが、その場の状況とか相手自身に関してどういう気持ちをもつかということもその内容をなし、発話時の意識形成に関わる。

4.1 終助詞と対人的相互作用

日本語では文末助詞、または、終助詞が発達している。これらの一連の助詞が表す話者の意識はたとえば英語では音調などのパララゲージ（周辺言語）、あるいはそれ以前の手振り身振り等のノンバーバルコミュニケーションにより伝えられるもの、また、タグクエッションという連語的なものや、新たに節や文相当のものを設けるなどという様々な形をとって表現されるものであり、それが日本語では文末の終助詞という「辞」の形にコード化されているのではないと思われる。この言わば未分化な形態は或る認知、それに伴う感情的なもの、に発して、「詞」による分化され客体化された表現へ到達する前段階のものとする見方ができそうである。

発話の内容を相手に伝えるに際し、その内容との関係で相手をどう意識するかが文末助詞または終助詞の形をとってコード化されていると見られる。ここでは「ね」と「よ」を取り上げることしよう。

- ・あそこは寂しい（わ）ね。
- ・あそこは寂しい（わ）よ。

この二つの日本語は英語では周辺言語によるか、そうでなければ、それぞれ次のような文に相当すると考えられる。

- ・It is lonely over there, isn't it?
- ・It is lonely over there, I tell you.

この二文の「ね」「よ」に相当する英語の部分は文論上、異なる性質をもつ。第1節で、日本語というラングを対象として既に山田が

文を二大別して、「喚体の文」を設定していた指摘した点がここで想起されよう。佐治（1956）は「終助詞の機能」として談話-指向の機能を指摘している。Hinds（1976）は日本語非母語話者として早くに日本語の談話では話し手と聞き手の相互作用に様々なものが見られると指摘した。McGloin（1990）は「さ・よ・ぞ・ぜ」には強要の、「な・ね」には確認と協調の、談話-指向の機能があるとする。「情報の縄張り」理論で知られる神尾（1994）は語用論上の情報-関連機能として打ち出された。

話し言葉自体の分析はこの間、英国で先述のBernsteinに続いて1980年代からBrown, G.（1982）が「情報-指向」と「聞き手-指向」という見方を提唱し、米国ではギリシャ出身のTannen（1990）が男女の言葉の差を「報告ことば」と「協調ことば」とするなど、多くの研究が進んだ（Ujiiie 2001）。

このような流れの中に先のMcGloinも位置づけられようし、また、Maynard（1997）の文末の終助詞「ね」「よ」に関する「相互作用-指向」「情報-指向」という談話機能の分類として注目されているものもある。これがまさに上掲の英文を言い換えたような術語となっている点も興味深い。

Hidasi（1997）はよく知られた多くの印欧語とは対照的に日本語がコミュニケーション上、態度的機能を表現する手だてに優れた言語だとする。また、モダリティーが表面的に大変似通っている朝鮮語と日本語を話者の態度と意見（モダリティー）の文法化という点で比較したHorie（2003）とHorie and Taira（2002）は朝鮮語が文の命題内容により関わる一方で、日本語は相互作用性を指向するという大きな違いを挙げる。

話し手と聞き手とが相互に作用し合いながら話し合うことが日本語の一特質であるという事は頻繁なうなずきなどの目に見える現象から指摘されていることとも合致する。前章で見た、ウチ集団でのコミュニケーションを凶ってきた言語使用の別の側面と言えそうである。

4.2 「辞」の敬語 — ‘addressee honorifics’ 設定の誤りを自覚化 —

対人表現そのものは表現する内容そのものと次元の違うものを併せ持つ。そのせいか、「辞」が主観的であるということを実に物語る。あるいは、それは聞き手に対する直接的な態度として出るものであるため、見やすいからかもしれない。前節に引き続いて、対人意識の表現として、待遇表現の場合を挙げる。

これについては既に或る程度明らかにした(Ujiié 1999、氏家2000) ので、ここでは結論的なことを述べるにとどめたい。待遇表現中の敬語とされる部分は20世紀初頭に「尊敬語」「謙讓語」「丁寧語」と分類されてから、それが広まり、一般化している。2章で見た「自立語」「付属語」が一般化した風潮と符丁を合わせた現象である。そして、実はここでも時枝(1941)が「詞」に属す敬語と「辞」に属す敬語を分けている。「です」「ます」等の語は話し手の相手に対する直接的な声(辞)であり、例えば或る人の行為(「話す」という言語素材を客体化された語(詞)で表現する(「お話しになる」)ものとは次元を異にする。しかし、これも先の三分類に慣れた人達にはなかなか理解されるところとはならなかった。

幸い、辻村敏樹(1967)により、「素材敬語」「対者敬語」という名が与えられた。さらに、これが日本社会で三分類に慣れているこ

とのない非日本語母語話者である研究者に理解され、英語での日本語研究書の取り上げるところとなった。興味深いのはそこから印欧語における印欧語自体の敬語分類が訂正される点である。類型論のComrie(1976)の業績であるが、その指摘に、既成の印欧語敬語分類に慣れた研究者が信じがたい思いを露にしながら訂正を受け入れている(Brown and Levinson 1987, Levinson 1983)。Comrieはジャワ語と日本語の敬語からこの訂正の必要性が明らかになったとしたが、2000年11月に上智大学での講演会後に直接、質問して得た返事は「明確なのは日本語の敬語からである」ということであった。また、それより先、拙論(Ujiié 1999)を1998年に送ったところ、既に1941年に二種の敬語に分かれていたという点に関し、そんなに早くそうした分析がなされていたとは知らなかったという返事が届いた(Comrie 1998, 2000)。

つまり、それまで、待遇に関わる人称代名詞として、フランス語の‘tu’と‘vous’の問題が取り上げられていた。親しくなる前は相手を後者で呼ぶが、親しくなるとは前者となる。或いは、何らかの理由で相手と距離をとった表現をとることが望ましいという判断があれば、‘sir’や‘madam’が使われる(Brown and Levinson 1987)。これらが‘addressee honorific’とされ、‘referent honorific’とは区別されてきた。これらはそれぞれ「聞き手敬語」、「指示敬語」と訳されようか。この術語(原語)はいつごろから使われるようになったのであろうか。「伝統的記述」としてるところから察すると一定の古さをもつことは推測される。実はこれらは日本の「対者敬語」「素材敬語」に当たる。そして、Comrieの指摘以来、どこまで一般化したかは不明だが、

少なくとも Levinson は英仏語に ‘addressee honorific’ は存在しない、今までそれだと思ってきたのは「あなた」ほか、指示するものをもつ ‘referent honorific’ だということを驚嘆しながら明言したのである。いまや、日本語の「対者敬語」は独自性の強いものとして知る人ぞ知る存在となった。ポライトネス理論では相手との距離を保つための表現として日本語の敬語が挙がる。しかし、この敬語とは「辞」の敬語、「対者敬語」であるべきだろう (Ujiie 1999、氏家2000)。現実には詞辞両種の敬語が一文内で共に使われることの多いことが一因となって、また、既成の三分類が浸透しきっているためもあると推定するが、ポライトネス理論を扱う多くの日本人研究者はまだこの点に気づかずにいるようだ。言語過程説が、そして、「詞」と「辞」とが理解されずにいるのと同根なのか。

5 結 び

以上、日本語では精神活動の一としての或る認識のプロセスがコード化されているということを見た。印欧語で周辺言語やノンバーバルの手段等で表される極めて主体的な部分が日本語ではコード化されている。そして、それは伝統的な日本語分析を引き継ぐ時枝誠記の言語過程説において「辞」として分類されるものに属する。伝統的な日本語分析が文学作品に表れたことばの形を精神活動との関連において究明してきたということを考えると納得のいくことである。

具体的には話し手の内的意識状態に焦点を置くものを第3節で、また、聞き手に対する発話時点の意識状態に中心のあるものを第4節で考察した。

第3節で見たのは含過程構造をもつ語であ

り、話し手が或る時、認知、認識したことをそれ以前に予期していた、し得ていたことと結び付けての発話に使われる。ここに二種の区分を設けた。(A)自己の知識や経験、また、(B)自己の所属集団で既定のこととされる前提や価値観、と結びつけて発話する。その結び付けを一語で行う。これにより交信が可能であり効率的であるということは日本語がウチ社会でのコミュニケーションにより発達してきた言語だということと切り離して考えることはできない。

第4.1節では終助詞と対者敬語について検討した。前者は英仏語では語としてコード化されておらず、タグクエッションや文相当表現によるものが、日本語では文末に来る、一連の終助詞として発達しているという点である。この場合はウチ社会でのコミュニケーションにより発達してきた言語だということのほかに、膠着語であるために、屈折語としての印欧語では周辺言語で表されるものがコード化されたということを考える視点も必要かと思われる。

第4.2節は時枝言語過程説において、日本語の敬語も詞と辞とに分けられることに関するものである。語を詞と辞に分類することについては一般に理解されずに来たが、敬語の場合は辻村敏樹により、素材敬語、対者敬語という平易な語が与えられたことも力となって、日本語非母語話者である言語研究者にこの分類が着目された。その結果、Comrieにより、印欧語で ‘referent honorifics’ (指示敬語) と ‘addressee honorifics’ (聞き手敬語) とされていた印欧語の伝統的な記述が間違いであり、両者共に ‘referent honorifics’ であって、印欧語に ‘addressee honorifics’ はないと修正されるに至った。Levinson はこの点を指摘

して驚きの気持ちをもを表明している。ポライトネス理論において日本語では敬語で消極的配慮を示すとされた点は敬語全般ではなく、辞の敬語によって示されるものということになる。しかし、日本の研究者においてもまだ理解されたとは言えないのが現状である。

日本語の分析に当たっては、印欧語という系統を異にする言語の記述法に基軸を据えて外形的に分析するのでは見えなくなるものがある。逆に、江戸期以前からの認識的な日本語記述が当を得ており、それを客観化し、深めた時枝言語過程説の力があって、精神過程、認識作用の或るまとまりが日本語にコード化されていることが明らかになった。また、印欧語の敬語に関する伝統的記述において長期間気づかれることのなかった誤りが指摘されるという結果まで出たことは特に注目を要することである。

参考文献

- 藤井貞和 2000 「国語学史的成立—時枝誠記論の一環—」『思想』899号
- 橋本進吉 1934 『新文典別記』富山房
- 橋本進吉 1948 『国語法研究』（橋本進吉博士著作集第二冊）岩波書店
- 今泉忠義 1980 「口語文法」『国語学大辞典』（国語学会編）東京堂出版
- 大野 晋 1978 『日本語の文法を考える』岩波書店
- 佐治圭三 1956 「終助詞の機能」『国語・国文』26、23-31
- 鈴木一彦 1980 「言語過程説」『国語学大辞典』（国語学会編）東京堂出版
- 時枝誠記 1941 『国語学原論』岩波書店
- 時枝誠記 1955 『国語学原論 続篇』岩波書店
- 辻村敏樹 1967 『現代の敬語』共文社
- 氏家洋子 1969 「文論的考察による統続助詞『の』

- の設定」『国文学研究』（早大）41、91-98
- 氏家洋子 1974a 「『関係づけ表現』としての『接続語』」『早稲田大学語学教育研究所紀要』12、1-16
- 氏家洋子 1974b 「日本語に見る含過程構造」国語学会1974春季大会口頭発表 要旨：『国語学』98
- 氏家洋子 1989 「日本語の含過程構造とそれを育んだ状況共有社会」『山形大学研究紀要（人文科学）』vol. 11, no. 4（氏家洋子1996所収）
- 氏家洋子 1992 「ノス文の成立とその背景：日本語史との対話」『辻村敏樹教授古希記念論文集 日本語史の諸問題』554-572 明治書院
- 氏家洋子 1996 「言語文化の視点：「言わない」社会とことばの力」おうふう
- 氏家洋子 1999b 「辞の敬語と消極的ポライトネス：聞き手に対する心的態度の表明」『山口大学教育学部研究論叢』vol. 49, Part 1、41-54
- 氏家洋子 2001a 「『差別語』狩りの実態：教科書から消える『差別語』」『日本語学』vol. 20, no. 6、79-93
- 山田孝雄 1936 日本文法学概論 宝文館
- Bernstein, B. 1973 *Class, Codes and Control, vol. 1*, Routledge and Kegan Paul
- Brown, G. 1982 The Spoken Language, in Carter R. (ed.) *Linguistics and the Teacher*, Routledge and Kegan Paul
- Brown, P. and Levinson, S. 1987 *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge: Cambridge Univ. Press
- Collick, R. M. V. 1983 'Yahari', In Ichikawa et al (eds.) *New Collegiate Japanese-English Dictionary*, Kenkyu-sha, Tokyo
- Comrie, B. 1976 Linguistic Politeness Axes: Speaker-addressee, speaker-referent, speaker-bystander, Pragmatics Microfiche 1.7:A3.
- Comrie, B. 1998, 2000 Personal correspondence
- Furth, H.G. 1966 *Thinking Without language*, The Free press
- (柴山教潤・氏家洋子訳(1982)『言語なき思考：聾の心理的内含』誠信書房)

日本語にコード化された認識作用

- Hall, E. T. 1976 *Beyond Culture*, Garden City NY: Double day Anchor Books.
- Healey, G.H. 1974 *Introduction to Japanese, vol. 1-4*, Centre of Japanese Studies, The University of Sheffield
- Hidasi, J. 1997 Cross-cultural Differences in User's Expectations, in Klaudy-Kohn (eds.), *Transfere necesse est*, Scholastica, Budapest, 97-101
- Hinds, J. 1976 *Aspects of Japanese Discourse Structure*, Kaitakusha, Tokyo
- Hofstede, G. 1997, *Cultures and Organizations*, McGraw-Hill, New York,.
- Horie, K. 2003 Modality from a Typological Viewpoint and Discourse Modality: On the basis of Japanese-Korean, Presented at 1st Conference of Japanese Association for Contrastive Linguistic Activities, Tokyo
第1回日本対照言語行動学研究会（東京外語大学本郷サテライト）講演
- Horie, K. and Taira, K. 2002 Where Korean and Japanese Differ:Modality versus Discourse Modality, In Akatsuka, N. and Strauss, S.(eds.), *Japanese/Korean Linguistics 10*. Stanford: CSLI [distributed by Cambridge University press], 178-191
- Humboldt, W. von (1836) *On Language:The diversity of human-language-structure and it's influence on the mental development of mankind* (translated by Heath, P. 1999), Cambridge University Press, Cambridge
- Kamio, A. 1994 The Theory of Territory of Information: The case of Japanese, *Journal of Pragmatics* 21, 67-100
- Levinson, S. 1983 *Pragmatics*, Cambridge University Press, Cambridge
- Maynard, S. K. 1997 *Japanese Communication*, Hawaii University Press, Honolulu
- McGloin, N. H. 1990 Sex Differences and Sentence Final-Particles, In Ide, S. and McGloin, N. H. (eds.) *Aspects of Japanese Women's Language*, Tokyo: Kuroshio-publishers, 23-41
- Tannen, D. 1990 *You Just Don't Understand*, Ballantine Books
- Ujiie, Y. 1986 Utilisation of a Given Form in Natural Language: Developed use of the function of Japanese particle 'NO', *Travaux de Linguistique Japonaise*, vol. 8 (Univesrité de Paris 7), 143-150
- Ujiie, Y. 1987 Japanese People's Mental Processes Reflected in the 'WA' Sentence, *Bulletin of Yamagata University(Cultural Science)* vol.11, no.2, 197-208
- Ujiie, Y. 1988 Epistemological Study on Language: Mental integration observed in Japanese adverbs, *Bulletin of Yamagata University (Cultural Science)* vol.11, no.3, 253-270
- Ujiie, Y. 1999a Japanese Characteristic Expressions of Subjective World and Interpersonal Relationships Developed in Japanese Society, *Romanian Journal of Japanese Studies* No. 1, 79-87
- Ujiie, Y. 2000 Politeness and Japanese Honorifics: Addressee honorifics as a marker of speaker-hearer distance, *Bulletin of the Faculty of Education, Yamaguchi University*, vol. 50, Part 1, 1-10
- Ujiie, Y. 2001b The Evolution of Linguistic Expression in Japanese and English Societies, *BULLETIN of Saitama Gakuen University, Faculty of Humanities*, No. 1, 13-23
- Ujiie, Y. 2003 (to be published in October) Expression of Personal Feeling, Society, and Language: In the case of discriminatory consciousness in Japanese society, *Proceedings of the 17th International Congress of Linguists*, CD-ROM